



A-03 感染性呼吸器疾患

きゅうせいきかんしえん

急性気管支炎

【概念】

急性気管支炎の多くは、かぜ症候群での上気道の急性炎症が連続する気管から気管支へと波及することで発症します。

【疫学】

急性上気道炎が気管から気管支まで波及し、せきやたんを伴うようになったものを急性気管支炎と診断するため、その頻度は極めて高いとされて

います。

【原因】

原因微生物としては、かぜ症候群と同様にウイルスによるものが多いといわれており、特にインフルエンザが重要です。肺炎マイコプラズマ、肺炎クラミドフィラ、百日咳菌などが原因となる場合もあります。また、ウイルス感染に引き続いて、二次性の細菌感染が起こる場合もあります。

図1 急性気管・気管支炎におけるウイルス感染と細菌感染の鑑別，治療，予防



(日本呼吸器学会. 成人気道感染症診療の基本的考え方. 2003 から引用、一部改変)

図1



【発病のメカニズム】

多くはウイルス感染により、気道上皮の壊死、脱落などが起こり、気道が障害されると発症するといわれており、二次的に細菌感染を生じると肺炎にいたる場合もあります。

【症状】

主症状としてはせき、たん（膿性のこともあり）があげられます。発熱、食欲不振、全身倦怠感といった全身症状を伴うことや前胸部不快感を伴うこともあります。

【診断】

典型的なかぜ症候群と異なり、せき、たんといった下気道症状が主体となるため、このような症状から疑います。たんからウイルスを証明したり、細菌を証明することにより診断がつきます。発熱などの自覚症状が長引く場合には、肺炎の合併を鑑別する必要があるため、胸部エックス線画像もしくは胸部CTで確認します。細菌による二次感染を伴うとたんの量が増加し、性状も膿性となってきます。

【治療】

①対症療法

原因菌の多くはウイルスであることから、インフルエンザを除いて病原体に特異的な治療薬はありません。このため、安静、水分栄養補給などの対症療法が中心になります。

②細菌感染が疑われた場合

適宜、抗菌薬を使用します。

【生活上の注意】

かぜ症候群と同様に普段から感染予防をすることが大切です。マスク着用や手洗い、うがい、咳エチケットを励行してください。

【予後】

基礎疾患を有する患者に細菌感染を合併したような症例を除けば、一般的に予後は良好です。

急性気管・気管支炎の症状、診断、治療について、日本呼吸器学会のガイドラインから引用したまとめを図1に示しています。

(2016年12月)

MEMO

日本呼吸器学会では学会ホームページにて「市民のみなさま向け」に様々なコンテンツを公開しています。ぜひご覧ください！



呼吸器の病気

Respiratory disease

『疾患別』に症状や、診断・治療方法を解説しています。

呼吸器

Q&A



『症状から』対応方法などをQ&A形式でお答えします。

※ここに書かれている内容は、あくまで一般的なものであり、必ずしも貴方の病気にあてはまらない事もありますので、この内容を参考にし、呼吸器の専門医の診察を受けてください。

日本呼吸器学会
ホームページ

www.jrs.or.jp/